

世界防災Jr. 会議 グッド減災賞

金賞受賞!

本校の取組を世界に向け発信

多高通信

宮城県多賀城高等学校
多賀城市笠神2-17-1
発行 防災教育担当

国連防災世界会議 特集号2015.3.14-18

UN World Conference on
Disaster Risk Reduction
2015 Sendai, Japan

ならんごころむー番町



最高賞の金賞を受賞した二年下山彩絵さん(左端)と二年後藤環君(左から二人目)

東日本大震災後、地道に「ブ、地域や他の高校との交り、まず審査委員会が優秀な発表を行った本校の防災・減災、国際交流の様子を中心として発表内容が認められた。当日は9件の発表が行われ、本校の発表が最優秀賞となり、副賞40万円を獲得した。賞金は今後の防災教育に使われる。

「グッド減災賞」で発表した内容(抜粋)

通学路の安全 「通学防災マップ」の作成



自宅から学校までの通学経路を記入家庭でも通学路を確認



全国と交流する。発信する



「グッド減災賞」を受賞した二年下山彩絵さん(左端)と二年後藤環君(左から二人目)

下山彩絵さんの感想
発表してからの感想は、緊張感も少し減りましたが、発表の準備期間も大変なところもありました。発表の準備期間も大変なところもありました。発表の準備期間も大変なところもありました。

「次世代の防災教育を養成する」
「災害に強いコミュニティ」とは、復興研究の第一人者、米国バドュー大学准教授ダニエル・P・アルドリッチ氏と山形大学地域教育化学部教授上山真知子氏の講演が行われた。講演を中心に子どもや教員の心理的ケアなどにあたりたい。

ワーカーシップでは、これら6名の生徒も他校の高校生とグループをつくり、討論・発表を行った。その後、アラドリック准教授は自身が行った体験を、市職員として地域コミュニティを活性化させながら災害からの復興事業を考えよ。というテーマでワークショップを行った。

本日から参加者全員でドラマを行われ、発表を行った。本校からの参加者は藤門莉生君、馬場美咲さん、鈴木木理子さん、土屋七海さん、北野健人君、伊藤優花さんですべて1年生。

せんだいメディアテーク

定評通り、その会場内に設置されたメディアテーク後、木島夏夏さん(2年)と亀山沙月さん(1年)が主催の防災教育がゼンテーションを行った。他、外国人や研究者らも数多く訪れ、一五〇名を超える活動の発表を予定していたパネレットも早々に満員となった。



そのほか、招待講演として、第一高等学院生徒による経験談、イタリアの高校生の防災・減災についての発表が行われ、本校の発表が最優秀賞となり、副賞40万円を獲得した。賞金は今後の防災教育に使われる。

本校の発表は、被災地でも考える防災展が行われた。県内外の研究機関や大学と並び、本校も津波標識設置活動を説明するパネルや実際に使われている津波標識、国土交通省から借り受けた「釜石の奇跡」で知られる釜石東中学校の津波で被災した教材、平成28年度開設予定の「災害科学科」のPRポスターなどを展示した。トランプネットや、クワリネットなどの教材には、まだまだ生々しく津波を思い起こさせるような土や砂が付着しており、たくさんの方が足を止めて写真に収めるなどしていた。

その会場内に設置された発表用コーナーで15日午後、木島夏夏さん(2年)と亀山沙月さん(1年)が主催の防災教育がゼンテーションを行った。他、外国人や研究者らも数多く訪れ、一五〇名を超える活動の発表を予定していたパネレットも早々に満員となった。



一五〇名を超える活動の発表を予定していたパネレットも早々に満員となった。



本校の発表を聞く大勢の聴衆

ALL ENGLISH SPEECH

満員の東北大学萩ホールで堂々発表

第3回国連防災世界会議パブリックフォーラムのメインフォーラムが16日、東北大学萩ホールで行われ、(主催)文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、宮城教育大学、「持続可能な開発のための教育を通じた防災・減災の展開」より良い子どもたちの未来に向けて」をテーマに、山脇良雄(文部科学省国際総括官)の挨拶のあと、東日本大震災被災地における実践事例発表が行われた。東北大学、宮城教育大学、気仙沼市立宮城教育大学、気仙沼市立宮城教育大学からの発表後、災害科学科開設に向けた歩み「ユネスコスクール加盟を目的として」と題し本校が行った発表は、はじめに、小泉博校長が本校の防災教育とESD(持続可能な開発のための教育)現代社会の諸課題を自らの問題として捉え、身近なところから学習や活動を行う」の関係について概略を説明し、小畑綾香さん(3年)と藤門莉生君(1年)がESDの視点で捉えた本校の防災教育の取り組みを英語で発表した。当



発表する小畑さん(左)、藤門君(中央)、小泉校長(右)

Beyond Tomorrow 国際交流事業

フィリピン人学生来校

東日本大震災により被災した若者のリーダーシップを目的として来校、本校が教育支援事業である Beyond Tomorrow(以下ビヨンド)の文化や台風被害について説明がなされ、多賀城から3つのグループに分かれ防災に関する問題点(地域や学校)が果たす役割、災害の伝承について話した。復興支援をもち、積極的な意見交換を行いその結果を共有した。

一行は、津波で被災した多賀城市内の大型スーパー屋上へ移動し、津波が押し寄せた様子を見ながら、インターネットで当時の状況に視覚的に入り、現在と当時の様子を重ね合わせている。途中の多賀城市八幡地区



フィリピンを紹介するチャリス・マルタンさん

「東北、そしてアジアの若者の力」被災した若者達の声

14日に本校を訪問したビヨンドトウモロローは、T K P ガーデンシティ勾当台でフォーラムを開催、ビヨンド奨学生が震災で家族を失った、災害で1人の命を奪われてはいけぬ。と訴えた。フィリピン人の学生からは三陸や本校を訪れたときの報告で、提言がなされた。その中で、ジェンサ・ラビラップさんは、「災害による被害を減らすためには、教育が大切だ。多賀城高校の標識設置活動はとて素晴らしい例だ。」と述べた。その後のパネルディスカッションでは学生が主体となり地域とコミュニティを形成する案も出され、本校から参加した生徒も積極的に発言していた。フォーラムでは外務省国際協力局審議官の豊田欣吾氏が講演を述べ、安倍昭恵首相夫人が学生たちにメッセージを送った。



フォーラム後、安藤昭恵首相夫人(左)と安倍夫人(右)から鈴木奈々子さんと小畑綾香さん

「生きる力」SENDAI CAMP報告

18日、東北大学災害科学国際研究所が主催する「生きる力」市民運動化プロジェクト推進のためのシンポジウムが、東北大学学川内キャンパスで開催された。本校からは昨年9月に行われた被災訓練プログラム「SENDAI CAMP」の発表を行った。英語を交えながら1年の伊藤いずみさんと伊藤結花さんが、自分たちの参加した模様を説明した。繁華街で大地震が発生した時のリスクを実際にまわ歩きしながらコミュニケーション、避難所を想定し食事の配布作業をしたことなど、説明と感想を述べた。

続いて、1年の北野健人君、亀山沙月さんが本校の防災教育について説明した。2年の千坂星菜さん、倉本大生君、岩淵友亮君はS P P 事業で取り組んだ調査から発展させた「北上川などに堆積する砂から地震形成を調べレポートの動きを探る研究」を発表した。

伊藤結花さんの感想「防災会議を通して、防災は常に身近な存在だと捉える必要があると感じた。会議で提案されたことを少しずつ実践したい。」



伊藤いずみさんと伊藤結花さん

多賀城市との連携事業スタート

多賀城市では19日、国連防災世界会議の関連事業として、市民を対象に減災について考える減災市民会議を開催した。

午前中は、本校で設置した津波波高標識をたどる「伝承と減災を考えるまち歩き」が行われた。この催しは、被災直後の現地の写真を見ながら、新しくできた災害公営住宅まで約1キの道を歩くというもので、



テレビの取材もある中参加者に説明する福田さん(左)と藤門さん(右)



多賀城市が作成したまち歩きマップ。津波津波設置された経路を歩いた。

設置の様子を披露した。このフィールドワークには約60名が参加。多賀城市民の他にも東京や埼玉、外国からも参加者があった。

出発点である市役所で標識を設置しようになった経緯を説明した3年の福田さんは、「私も津波に襲われた。同時に祖母を失った。この経験はたくさんの人に知ってもらいたい」と話した。

午後からはワークショップ形式の座談会「たがが女子会」減災の鍵は女子会が開催された。本校からは2年の藤原安弥香さん、佐藤光さん、中村梨子さん、高橋瑞穂さん、1年の岩佐彩音さん、木村優花さんが参加。あの日、あどとき、私たちが気付いたこと、など震災をテーマに話し合った。県外からも約30名の参加者は、高校生や大学生、主婦と年齢層も幅広く、世代ごとに様々な角度で震



ワークショップに参加する中村さん、藤原さん、高橋さん